第 2 章　研修生の報告

第 3 部

（2）感想

3－(2)－1　タイ・カンボジア研修に参加して ・・・・・・・・ 天野　恵美子

3－(2)－2　26 日間の研修を終えて・・・・・・・・・・・・・ 市村　美佳子

3－(2)－3　NGO、タイ、カンボジアとの出会い・・・・・・ 河野　幸子

3－(2)－4　26 日間で見つけた「未来」・・・・・・・・・・・ 川畑　斉大郎

3－(2)－5　研修の感想・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 木村　愛里

3－(2)－6　海外派遣研修を通して学んだこと・・・・・・・ 工藤　裕章

3－(2)－7　必ずしも答えは一つではない・・・・・・・・・・ 小杉　優輝

3－（2）－1　タイ・カンボジア研修に参加して

天野　恵美子

はじめに、本研修に関わって下さった関係者、研修生の皆様、お世話になりありがとうございました。大きないびきで、ご迷惑をおかけいたしましこと、この場を借りて、お詫びいたします。研修日数が 26 日間と長く、ハードなスケジュールだったので、体力的に大丈夫か、心配でしたが、皆様のおかげで無事研修を終えることができました。

堆肥の攪拌を実践（ノンパイ村、タイ東北部コンケン県）

環境修復保全機構（ERECON）のタイ・カンボジアでの活動を、まさに最前線で見ることができ、有意義な時間を持つことができました。研修生を連れて行くまでの準備、現地での様々な問題への対処など、NGO スタッフには即断、即決が求められていると感じました。生半可な気持ちでは活動はできないと、肝に銘じた次第です。行動を共にする人に対して、安全への配慮、健康管理など大変なこともあったに違いない。それにもかかわらず、常に笑顔を絶やさず、穏やかに見守ってくれた ERECON の石山さん、お疲れ様でした。

トラクターの荷台に乗って村内の堆肥槽を 20 箇所確認！（ノンパイ村、タイ東北部コンケン県）

タイを訪れるのは、今回で 3 度目です。前回は北部都市のチェンマイに行きました。チェンマイはタイの第 2 の都市といわれています。市内は自動車、バイクが多く、排気ガスで空気が汚れています。しかし、車でほんの少し郊外へ行くと、そこにはたくさんの緑があり、澄んだ空気があります。

小学校の先生による環境教育実施についての会議に参加（王立農業大学、プノンペン、カンボジア）

あるホテルでは、水田を作っており、それを観光客に見せています。水田は、それぞれ生長過程が違い、もみを撒く、苗を作る、田植えをする、水田で稲を作る、稲を刈り取る、刈り取った稲を干す、脱穀、それぞれの過程を一箇所で見ることができます。それが、このホテルの特徴であり、ホテルの観光資源です。そこにいながら、稲作の実際を見ることができまし

た。観光スポットとしての稲作なので、面積は広くはないですが、興味深い体験をすることができます。このような資源の利用方法もあるのだと、考えさせられました。以下の写真がその過程です。

もみを撒いてある

苗が生長

さらに苗が生長

水田での稲作

全景

農作業小屋

もみを選り分ける

田おこし（人がやっている）

このように緑が豊富な地もあれば、同じタイでも地域が違えば環境も違います。今回の研修では、東北部のコンケン県ノントゥンモン村に行きました。そこは、塩害地域であり、稲が豊富に取れるわけではありません。都市部に出稼ぎに出る人が多く問題となっている貧しい地域です。緑豊かな地域を見たこの目で、塩害地を見るのは辛いことでした。この地でERECON は、現地農家が安定した農業生産を営めるように、塩害による荒廃地の農地化に向けた救援活動を行っています。塩類土壌の修復保全に有効な技術の開発、適用、現地農家と協働での耐塩性樹木の植林、塩害対策セミナー、植林ワークショップの開催 、塩害対策をまとめたパンフレットの配布などをしています。根本的な解決は難しいかもしれませんが、耐塩性の植物の栽培ができるようになればと思います。

塩害地

土壌調査のため鍬で土を掘る

スマトラ島沖地震にともなう津波は、死者 21 万人を超える大被害をもたらし、タイにおいても南部の沿岸を中心に、人的被害だけでなく、自然環境や農地等の生産基盤も大きな損害を被りました。津波被災地のパンガ県の視察では、自然災害の爪あとを見ることとなりました。津波発生より 4 年が経とうとしていますが、いまだに津波により陸に押し上げられた船、倒木、海岸線の大きな変化などが見られます。樹木も流され、その後、植林されていますが、まだ小さく生長途中です。家族を亡くし、家を失くし、多くのものを失ってしまった人々の心の傷が、癒えるまでに多くの時間を要するのではないでしょうか。このような厳しい状況の中、トゥンラック村のリキット氏を中心とするマングローブ植林グループは、マングローブの森を環境保全、漁場確保、水資源確保、木材資源として利用、次世代に残すために活動をしています。今回、ラマダンのためにスケジュール変更がありましたが、ERECON のスタッフのすばやい対応に驚きました。トゥンラック村での植林活動は、天気が悪く種を拾うだけでしたが、マングローブ林を見ることができ、良かったです。枝だと思っていたのが、実は種であることも分かりました。植林活動をしなければ、マングローブ林が守れないのでしょうか。自然を生かすのも駄目にするのも人間しだいであると強く感じました。

初めて訪れたカンボジア、トゥール・スレン収容所で見た殺害された人々の写真が頭から離れません。多くの人々が拷問を受け殺害されました。ポル・ポト政権下における虐殺の報道を見ている私にとって、とても重い場所でした。

ホテルの窓から見えるカンボジアの市場の活気に触れたくて、朝、早起きをして何も持たずに出かけました。サンダル履きで、あたかも現地の人のように、ふらふら見て歩きました。タイの市場と同じ野菜が多く、カンボジアもタイも同じ野菜を栽培し、売っていると思っていましたが、タイからの物だと言われました。

今回の研修では、多くのことを学びました。しかし、考察するということでは、まだ、勉強不足であると感じています。今後、この学びを深め、自分ができる範囲で、何らかの形で NGO 活動に関わりたいと考えています。

最後に、研修生のぴろ、すぎ、せいちゃん、えりちゃん、さっちゃん、みかこちゃん、皆に会えて良かった。ありがとう。そして、これからもよろしく、お願いします。

3－（2）－2　26 日間の研修を終えて

市村　美佳子

はじめに

私はこの研修で多くの発見をし、様々なことを感じ、思いを巡らせた。その中から、ここでは、途上国で活動する NGO スタッフに求められること、タイとカンボジアでの二つの出会い、そして、タイで見聞きした住民主体の活動から感じた日本社会への示唆について記そうと思う。

途上国で活動するNGOスタッフに求められること

まず、今回の研修を通じて私が痛感させられたことは、途上国で活動する NGO スタッフに求められることは、理念や情熱よりもまずは体力であるということである。限られた時間や資源の中で、高い効率でプロジェクトを遂行し、支援者への説明責任を果たすために結果を出すことが求められる。日本から来た人間にとって、砂埃と強い日差しだけでも、プロジェクトを遂行するにあたっての大きな障害となる。研修の間、私は、とにかく体調不良になることが怖くて、体調管理を徹底し、予防を目的に薬にも頼るなど常に神経を張り詰めていた。遠慮せず「図太く」いることも、私が 26 日間を乗り切るためには重要であった。そして、私は大事なく、現地研修を無事に終えることができたが、これは、期間が限定されていて、しかも、私自身が主体的に動くのではなく、海外派遣研修事業の主催者である環境再生保全機構（ERCA）と実施を担当した環境修復保全機構（ERECON）両団体に連れて行ってもらった、という研修生の身分で可能だった。それを考えると、私たちをタイとカンボジアの NGO 活動の最先端に案内してくださり、研修を実施することに加えて、本業の NGO 活動も同時にされていた ERECON スタッフのバイタリティには圧倒される。

研修生主催のワークショップにて（ノンパイ村、タイ東北部コンケン県）

プレー・パン活動に参加している農家で糸巻き体験（タイ東北部コンケン県）

研修中に ERECON のスタッフが話してくださったように、NGO 活動は、チームワークである。NGO スタッフとして主体的に、また定期的に活動することが要求されると、自分一人の力では何も達成できないだろうということは簡単に予想できる。自分自身の安全を

確保するという意識だけでは、チームは機能しない。一緒に活動する仲間同士の気遣い、信頼関係、意思疎通が、NGO 活動において重要である。また、そこにある、仲間同士のつながりが、やりがいや楽しさの一つの源となるのだろうと ERECON のスタッフと 26 日間共に過させていただいて、とても羨ましく思った。

タイ、カンボジアで出会った人々

津波被災地での植林活動にあたり ERECON 現地スタッフのエアさんから説明を受ける（タイ南部ラノン県）

出会った全ての人について書きたいが、紙面の都合上、タイでホームステイをさせていただいた、ホストファミリーと、カンボジアで訪問した NGO のカンボジア事務所の日本人スタッフについて少し記すこととする。

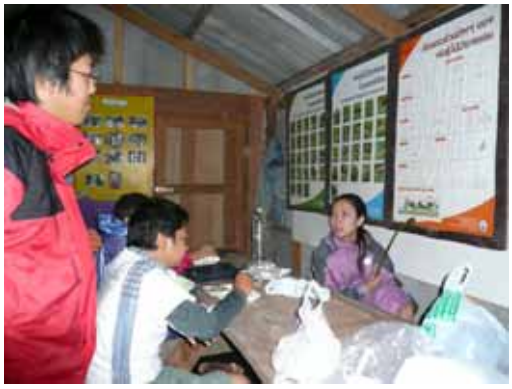
今回の研修を振り返って、まず思い浮かぶのは、タイでホームステイをさせていただいたノンパイ村の方々のホスピタリティと情の深さである。朝起きて、朝食をいただいて、研修活動で出かけ、夕方戻ってきて、水浴びをし、夕食をいただいて、寝る、ということを 5 泊 6 日のホームステイで繰り返した。研修中は、精一杯のつもりだったけれど、言語の壁があったことを考慮しても、きちんとコミュニケーションをとったとは言えなかった。それでも、ホストマザーたちは、毎日、温かくておいしい食事を準備してくださり、細身の私の健康を気遣ってくださった。村を発つ朝には、涙を浮かべて、私たちを見送ってくださった。改めてお礼を手紙で伝えようと、住所を伺ったが、帰国後、日本での忙しい毎日に追われて、後回しにしてしまっていた。この報告書を提出したら、私自身のこと、タイで学んだこと、ホームステイ中に伝えられなかったことを、タイ人の友人の力を借りて、手紙で送ろうと思う。

次に、紹介したいのはカンボジアで訪問した NGO の事務所の代表をされている方である。プノンペンでお会いしたときに伺った、「伝えることを伝え、早く日本に帰りたい」という言葉が私の頭から離れない。この方が、カンボジアが支援を必要としない自立した状態となることを心から願われていることが強く伝わってくる言葉だと思う。NGO・NPO 職員として支援活動に従事すると、大きなエネルギーをそのような活動に注ぐことができ、よりよい成果を生むことができる。しかし、私にとって、ボランティアとしてではなく NGO・NPO 職員として支援活動を行うということは、二つの障壁を乗り越えることである。一つは、支援が必要とされる状況が存在することで、自分が生計を立てるということについての道徳的な疑問である。もう一つは、NGO・NPO 職員の仕事の目的が支援対象を自立させることであると、目標を達成すると仕事がなくなるというディレンマである。私は個人的に以上のような二つの問題を考えてしまうので、お話しを伺った方のカンボジアの人々に対する深い愛

情と誠実さ、また、献身的で毅然としたあり方に感銘を受けた。

タイの市民社会と日本の市民社会への示唆

私は、NGO の社会における役割と、報告では割愛した NGO 活動の正当性について、この研修を通じて考えた。その際、私は、一定の役割が国家にあることを前提としていたが、私の思考は、そもそも国家の役割とは、という問いを軸にしたものに変わっていった。



モンスーンの雨が上がるのを待ちつつマングローブについて学習（タイ南部パンガ県）

研修では、タイの Prae-Pan（プレー・パン）グループやトゥンラック村におけるマングローブ林再生活動団体など、住民の方々主体による精力的な活動を知ることができた。また、私たちの研修中、タイでは、反政府運動が活発化し、政情が不安定な状況にあった。反政府運動を支持・推奨する訳ではないが、タイの政治を観察する中で、日本にはない、「市民の力」を感じさせられる。プレー・パンやマングローブ再生活動等も、市民活動と言える。しかし、市民の力が発揮されるにはそれ相当の社会的環境が存在すると思う。プレー・パンやマングローブ活動が誕生するにあたって、経済大国となった日本で私たちが当然のように受けている行政サービスの欠如・不備が大きい。

日本の社会においても、江戸時代の「お上」の意識の出現と同時期に、京都の町衆に代表されるような自治と相互扶助の意識を高く持った市民が存在した。戦争と戦後復興、経済成長を通じて、「公」に属する仕事は政府に任せ、日本の人々は、国力増大に励んだ。その結果、日本を世界で二番目の経済勢力の地位に築きあげた。そして、現代の日本社会では、日本政府の圧倒的な財政力と官僚制度の下で、緻密な行政サービスが展開され、日本の人々の中では、社会の構成員という自覚を持った市民として生きるという意識が後退してしまった。しかしながら、私たちが当然のように受けている行政サービスは、全てが行政によってなされなければならないというものではない。

私は、単なる住民ではなく「市民」が民主主義の単位となる存在であると思っている。そして、健全な市民社会がより暮らしやすく、誇りを持てる社会を創る。エネルギー資源の価格高騰、金融危機と世界的不況など、日本経済は荒波の中にあり、社会的にも少子高齢化など、緊急性の高いものから低いものまで多くの問題も抱えているが、今までも決して大きくなかった政府の更なる小さな政府化という逆境が、公私二分論、あるいは分業の思考を転換させ、日本の中に眠っている市民性が目覚める機会とならないだろうかと期待する。

おわりに

本文では割愛してしまったが、今回の研修で、タイ・カオヤイ国立公園でのトレッキング、タイ・トゥンナンダム島での散策とその周辺の水路移動、そして、タイ、カンボジア両国の農村地域での活動を通じ、タイとカンボジアの自然と触れ合う時間を得られたことが、とても嬉しかった。また、現地で出会った NGO スタッフの方々の熱の感覚、日本人スタッフと現地スタッフの間の厚い信頼関係と友情、タイの大学で有機農法の研究・開発をされている教授のビジネス・マインドとタイの人々の暮らしをよりよくしたいという情熱のバランスに触れることができたことは、私にとって大きなインスピレーションとなった。さらに、一週間弱のカンボジアでの滞在中、私たちに同行してくれた ERECON のカンボジア人のスタッフと、短期間で友情を育むことができたこともとても嬉しく思っている。長くて短い 26 日間は、私にとってかけがえのない時間となった。

最後になってしまったが、海外研修の主催者である ERCA と研修を実施してくださった ERECON、その他この研修に携わってくださった方々すべてに、貴重で実り多い体験をさせていただいたことに対するお礼を述べさせていただきたい。本当にありがとうございました。

シェムリアップ空港にて（カンボジア北東部シェムリアップ州）

3－（2）－3　NGO、タイ、カンボジアとの出会い

河野　幸子

プレー・パン活動農村にて機織り体験（タイ東北部コンケン県）

はじめに、私が本研修に参加させて頂く機会を与えて頂けた事に深く感謝し、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。正直、私は、NGO やタイ・カンボジア両国に対しかねてから研究をしていた身分にもなく、無学のまま研修参加にいたったと言っても過言でない者でした。そのため、選考を経て自分が参加者の一員であって良いのか、もっと望ましい人材が応募者にいたのではないかと迷う時期もありました。そんな自分の背中を押してくださったのが、ERECON スタッフの石山さんの一言「NGO の最前線の現場にお連れします」でした。その一言から、見たことない世界や人への好奇心と世界へ向ける目線の変化の欲求とが掻き立てられ決意に至りました。まずは、NGO スタッフの一声との出逢いに感動したことがスタートでした。

随行員の倉島専門家の通訳で小学校校長先生に小学校における環境教育についてインタビュー（ノンパイ村、タイ東北部コンケン県）

そして実際、現地に脚を踏み入れ、目にしたことのない環境、生活、表情、愛情に触れ、どの瞬間も脳裏に焼きついています。中でも、現地の生活に直に身を置いた農家ステイでの原体験は自身の生涯において原点になるのではないかと感じています。彼らは私に比べ低い生活水準にあるにも関わらず、彼らなりの今ある環境の中で最大限のもてなしをしてくれました。もし、自分が逆の立場に立っていたとしたら、彼らのように振舞えたか、受け入れられたか…本当に考えさせられ答えにいたっていません。どうして、自分達の暮らしでさえ精一杯な毎日のはずなのに、豊かな身なりをし、贅沢を申し出る異国の人間を快く出迎え受け入れてくれるのか。妬みもせず、まして嫌がらせをするわけでもなく、むしろ興味と愛情を持って接してくれました。精一杯な毎日の中にも、彼らの素朴で純粋で僅かな心の余裕の素晴らしさに気付かされ学ばされた様に思います。

また、街中やマーケット、村を歩く中で、タイにおいてもカンボジアにおいても日本では失われつつある「活気」に感動を覚えたことも印象的でした。どの通りを歩いても、言葉で

表しがたい人間力とパワーと笑顔が溢れていました。そんな空間に立って、彼らと片言の現地語で言葉を交わし、通じ合い、笑い合い、話題に対し頭一つにやり取りを交わしたとき純粋に楽しかった。もしかしたら、こんな瞬間に今回以上の高度なレベルで出会い続けること、もっともっと高い壁にぶちあたって何とかして越えてやるんだと、彼らと共に立ち上がることが自分を磨き続けるスタートラインかもしれない。そんな営みが自分にとっての幸せなのかもしれないと考えました。

研修生主催のワークショップを終えて（ノンパイ村、タイ東北部コンケン県）

そこから、今後、いつの日か、彼らと一緒に「何か」を成し遂げてみたいという想いが募りました。一緒になって脳に汗をかくくらい考え、腹を割って意見を交わし、時に意見が交錯し議論が発散したり、でもすぐにおなかの底から笑い合って手を取り合って前進したり、泥まみれになって耕し樹を植えたり…。私が上に立ち指示し続けるわけでも、下で指示を待つわけでもなく。

「一緒に」「同じ目線で考え」何かを成し遂げたい。これが私の今後のビジョンの一つです。今は、その「何か」の対象は何でもいいと思っています。彼らが直面している問題、些細な些細な困ったことを解決に向かうための行動、全人類が解決に向け行動を共にせねばならない課題（地球温暖化、HIV、貧困、人権 etc）解決プロジェクト、はたまた…一国、世界中、宇宙に轟くような誰も成し遂げられなかった歴史的なビックプロジェクト。

タイ国内でのドライバーさんとタイ語の学習中（タイ東北部）

そんな想いを胸に抱いています。大学卒業まで半年を切りましたが、来春社会に出て自分がファースト、セカンドキャリアをどう積み上げるか、どうしたら本研修で抱いた夢や想いを実現できるのか、どんな幸せを追求し続けたいのか。あらゆる角度から考え蓄え少しずつ行動に移していきたいと考えています。そして、そのスタートラインに立ったとき胸を張って皆さんに報告出来ればと大志を膨らませています。

最後に、本研修全体をコーディネートして下さった関係者、スタッフの方々、また、私が気付かない見えないところで支え続けて下さった方、様々な知識や情報を提供して下さった先生方、研修生のみんな…そして何より、両親と家族に対し感謝の気持ちを持ち、恩返しする情熱を馳せつつ私の感想と今後に代えさせて頂きます。

本当にありがとうございました。

小学校教員による有機農業推進活動にむけたワークショップにて（ノンパイ村タイ東北部コンケン県）

小学校教員による環境教育実施にむけたワークショップにて（カンボジア国王立農業大学、プノンペン、カンボジア）

3－（2）－4　26 日間で見つけた「未来」

川畑　斉大郎

感想

研修生主催のワークショップを終えて（ノンパイ村、タイ東北部コンケン県）

今回のこの研修に参加したきっかけは、とても些細なことだった。授業中に私の座席の前で話していた２人がこの研修の募集について話していたのを聞いたことがきっかけであった。言わば盗み聞きなのであるが、来年からビジネスの世界に来年から飛び込むにしろ、自分が大学時代に学び経験してきたことを活かして仕事をしたいと思っていた私にとって、実際にその夢を実現されている方々の活動に参加させていただく（しかもありえないほどの低プライスで！）ことが出来るのは願ってもないチャンスであった。

そんなある意味棚からぼた餅のようにして得た今回のチャンスであったが、今こうして振り返ってみると、人生観が変わるような経験をたくさんさせてもらったなぁ…としみじみ思う。

まず一つに、社会経験を踏まないままに自分の情熱と意志だけで NGO への進路選択を決めないで良かったということを強く感じた。こういう書き方をすると誤解されるかもしれないが、今回の研修を通じて改めて NGO で働く方々のマネジメント能力や状況判断力の高さを痛感した。それは大学卒業してすぐの私のような人間では到底出来ないことであるし、そういう力をこれからの社会経験でまず身につけていきたいなと改めて心に誓った。情熱と強い意志だけではつとまらないこともたくさんあるんだなということを、今回の研修で知り合った多くの方から教わった気がする。

津波被災地における ERECON の植林活動のため、モンスーンの雨の中活着調査に挑む（タイ南部ラノン県）

もう一つは、私と同じような志を持ってそれぞれに活動している素晴らしい研修生たちと出会えたことである。私を含めて７名の研修生は、皆バックグラウンドこそばらばらであるが、全員が強い情熱と意志をもってこの研修に参加していた。そんな彼らと語り合ったり、活動を共にしたりする毎日はとても刺激的であったし、ちょうど１年間の留学を終えて燃え尽き症候群のようなものに悩まされていた私の背中を力強く押してくれた。

今後の展望

このように、頭を揺さぶられるような経験や力強い動機づけをもらったこの研修を終えた今、これからの展望として思うことは、まず目の前に見える自分の未来を一歩ずつ歩いていこうということである。それは決して妥協であるとか、受け身であるとかネガティブな意味合いではなく、まずは自分が選択した「先の見える未来」の中で学び、得られるだけの経験を自分なりに昇華していくことが一番の近道であると考えるからである。

山田随行員によりカンボジア語研修を受ける（ロイヤルパレスホテル、プノンペン、カンボジア）

NGO を生業にして生きていくためには、まだまだ自分には足りないものがたくさんあることを今回の研修を通じて実感した。それこそが研修においての最大の収穫であり、これからの自分の未来を突き動かしていく衝動であると思う。そしてその「突き動かされた未来」の先で私がどこかの NGO の一員として活動していることができればと思う。

研修生による小学生を対象とした環境教育実践（プレイベン小学校、プノンペン、カンボジア）

謝辞

最後になるが、このような貴重な経験を私たちにさせてくださったみなさまに、月並みではあるが感謝の気持ちを述べたい。プログラムのオーガナイザーとして私たちをサポートしてくださった ERCA の皆様、NGO の内側を余すことなく見せてくださり赤裸々に現状を教えてくださった ERECON の皆様、そして私たちの活動に随行してくださった倉島さん、山田さん…本当にありがとうございました。

そして、研修生の皆。皆からは多くの気づきとこれからの人生についての動機づけを与えてもらったと思っています。こんな素晴らしいメンバーと共に過ごせた 26 日間は学生最後の夏の貴重な思い出です。本当にありがとう、そしてこれからもお互いに刺激し会える関係でいましょう。

And special thanks to all the people we met in Thailand and Cambodia!

3－（2）－5　研修の感想

木村　愛里

１．参加のきっかけ

自己テーマの冒頭においても述べたように、私は以前から国際協力に興味を抱いていた。その一方で、世界における食料問題についても、高い関心を持っていた。1970 年以降の「緑の革命」を経て農作物の収量が飛躍的に増加した中で、世界における化学肥料、化学農薬の消費量もまた大幅に増加した。また、開発された新品種は成長に水を多く必要とすることから、中東地域を中心に水不足の被害が出た。さらに、そういった技術革新の恩恵を被ることができた大規模農家と、技術や設備を手に入れるだけの資本を持たなかった小規模農家との経済格差が広まり、途上国において土地を放棄して都市部に流入する人口も増加した。これらの歴史的な経緯を経て、現在は大手バイオ関連企業による「遺伝子戦争」が過熱し、あらゆる効能を持つ遺伝子組換え作物の開発および栽培が促進されている。遺伝子組換え作物の経済的利益を主張する人々は多いが、やはり生物多様性への危険が懸念される。

プレー・パン活動の参加農村にて糸巻きの体験（タイ東北部コンケン県）

「緑の革命」の負の影響を反省材料として、私たちはこれからの食・農・環境を考えていかなければならないと思う。世界の人口が 2050 年には 90 億人に達すると予測される中で、環境に配慮しながら世界人口を養うだけの食料を生産しなければならない。そうすると、やはり注目されるのは有機農法の将来性であると思われる。このような興味・関心を持っていたため、近代農法により家計が圧迫されている人々に対して、有機農法を広めるという活動をしている ERECON の研修に参加しようと思い、応募を決意

研修生による小学生を対象に実施した環境教育実践（プレイサール小学校、プノンペン、カンボジア）

王立農業大学学生に通訳をお願いし、研修生による環境教育大成功！（プレイベン小学校、プノンペン、カンボジア）

した。

２．所感

26 日に及ぶ研修を経て、一番の感想は「楽しかった！」である。国際協力や環境保全活動を視察しに行って、純粋な感想が「楽しかった」で良いのかどうか、個人的に非常に不安ではあるが、とにかく楽しかった。タイでは、どの村に行っても人々は温かく、私たちに微笑みかけてくれた。カンボジアでは、バス移動が多く現地の人々と触れ合う機会はタイと比べると限られてはいたが、人々が時折見せてくれる笑顔がたまらなく優しかったのが印象的だった。

ヒル避けを履いてトレッキング準備（カオヤイ国立公園、タイ東北部ナコンラチャシマ県）

26 日間のスケジュールはとても盛りだくさんな中身で、一つ一つについて感想を述べるとものすごい分量になってしまいそうである。よって、全体として印象深かったことを述べるにとどめたい。

タイやカンボジアの都市部は、経済発展が目まぐるしく、近年の GDP の伸び率も都市経済が牽引している。一方で、私たちが視察した地方の地域は電気やガス、水道などのインフラ整備も不十分な状態であり、ほとんどの人々が第一次産業に従事している。それゆえ、当然のことではあるが生活と食・農・環境がほぼ一体化しており、少しの変化が生活に影響を与える。よって、農家の人々は自分たちの周囲の環境について非常によく知っている。私たちが、日本の環境について知っているより何倍も、自分たちの環境の変化について敏感であり、知見が深い。

トレッキングを終え、滝にて（カオヤイ国立公園、タイ東北部ナコンラチャシマ県）

私たち先進国の人間は、国際協力の場面ではどうしても「与える」立場にあることが多いが、こういう農家の人々の知恵や生き様からは大いに学ばなければならないと思う。環境を改善したり、維持したりすることは私たちこそ成し得ていないのが現状ではないだろうか。環境保護の重要性が叫ばれる一方で食・農・環境がますます身近に感じられなくなっていっている中で、私たち若者の世代が、また次世代の子どもたちが環境保全と維持を行っていくためには、農家ステイを体験せよとは言わないまでも、自然や農業を自分たちにとって身近なものであると捉えるための機会を増やしていかなくてはならないであろうと思われる。今回の研修を経て、今後は、私たち日本に暮らす人々が、自分たちを取り巻く環境をよりよく知ることができるような取

組みを行っていきたいと強く思うようになった。

また、有機農業の将来性についても、今後ますます注目していきたいと思う。有機農作物がブランド化し、世界的な需要が増加するにつれ、資本を持たない貧しい農家であっても、農作物市場へ出荷するチャンスを得ることができる。有機農業は経済の格差を生め、また環境保全と人間生活との「つなぎ役」となることが出来る可能性を持っていると思われる。今後ますます、有機農法を広める NGO 活動は活発化するだろうし、大学や政府レベルでもよりよい有機農法の研究は進むだろう。今後の動向を注意深く追っていきたいと思う。

最後になったが、今回の研修でお世話になった方々にお礼を申し上げたい。私たちを 26 日間引率してくださった ERECON の石山さん、三原先生、上野さん、倉島さん、山田さん、そして地球環境基金の勝又さん、長倉さん…たくさんの人々のお力添えがあったおかげで、とても素晴らしい研修を私は受けさせていただくことができた。心よりお礼申し上げたい。また、26 日間共に語り、励ましあい、共に頑張った他の 6 人の研修生全員にも、心からお礼を言いたい。本当に、ありがとうございました。

ノントゥンモン村でサブリーダーにインタビュー（ノントゥンモン村、タイ東北部コンケン県）

3－（2）－6　海外派遣研修を通して学んだこと

工藤　裕章

1.感想

私がこの研修に応募した理由は開発途上国や国際 NGO、開発途上国で活動されている日本人に興味を持ったことが始まりである。実際に開発途上国といわれている、タイとカンボジアに行って研修を行ったわけだが、タイに着くと外国に来たという感覚だけで開発途上地域に来たという感覚はあまりわかなかった。しかし、東北タイやカンボジアではその国の貧しさは垣間見られた。東北タイでは塩害で農地がダメージを受けており、カンボジアではいきなり物乞いにあった。初めて、開発途上国に来たのだと実感したが、そこに住む人たちはとても元気だった。「やってやる！！」といった様な気持ちにあふれているように感じて、たくましかった。しかし、この勢いが環境保全に配慮しない開発につながっているかもしれないと思うと少し怖い感じもした。そのために海外の支援団体からなどの国際環境協力活動が必要なのだなと生で感じることができた。

プレー・パン活動参加農村にて糸巻き体験（タイ東北部コンケン県）

研修生による小学生を対象とした環境教育実践で人の輪による地球づくり（ロンコール小学校、コンポンチャム州、カンボジア）

タイでは私が持ち込んだネイチャーゲームをワークショップの中で行い、ネイチャーゲームの必要性を改めて感じることができた。小学生のうちは体を使って、体験的に環境教育を受けた方が理解しやすいし、何より楽しく学べると思った。きっと、大人にも同じ事が言えると思うので、日本の大学生にも試してみたいと思う。そして、ネイチャーゲームやワークショップを成功させるためには現地のスタッフや小学校の先生方の協力が必要不可欠と感じた。この様な体験が環境教育を行うことができる人材育成にもつながってくるのだと思う。

遺跡修復の人材育成活動を視察（上智大学アジア人材養成センター、シェムリアップ州、カンボジア）

カンボジアで一番心に残っているのは「JVC」である。当初は JVC の事業が環境とあまり関係がないと思われたが、開発途上地域において人

材育成が一番必要であることに気づかされた。本当は国際 NGO なんていない方が良いはずだ。その国を早く自立させるためには人材育成をしなければならない。JVC には昔、馬さんという日本人がおり、彼は日本語だけでカンボジア人とコミュニケーションをとっていたようだ。コミュニケーションをとるのに大事なことは言葉が通じることだと思っていたけど、どうやら気持ちが通じていれば言葉なんていらないらしい。日本語しかできない私にとってはかなり衝撃的であった。

研修の合間の ERECON スタッフの仕事を手伝い、植林活動で使用した道具の清掃（ブンピヤリゾートホテル、タイ国南部パンガ県）

タイの南部では村の人たちでグループを立ち上げて、マングローブの植林活動などを行っている人たちに出会った。彼らは援助をほとんど受けずに活動を行っている。津波災害を機に、このままでは自分たちの生活が危ないと危機を感じ、立ち上がったらしい。マングローブの植林は自分たちの生活を自然災害から守るだけでなく、生物保全や地球温暖化防ぐ事にもつながっていることを理解して活動を行っている。彼らは国際援助はあまり必要ないと答えていた。

タイにあって、日本にないものはご近所同士の付き合いであり、タイでは地域にコミュニティが根付いていると感じた。昔の日本にはそれがあったとすれば、経済的に豊かになることで、なくなってしまったのだろうか。国際協力活動を行うことは開発途上国を援助するだけでなく、日本にはなくなった大切なものを再発見することができるのではないかと思った。国際協力活動は開発途上国の発展だけでなく、日本の発展にもつながってくるのではないだろうか。

2.今後の展望

海外派遣研修を通して、自分には知識が足りなさすぎると感じた。訪問先で話しているときも知らない単語がたくさん出てきたし、何よりも英語ができなくて苦労した。しかし、最後には話せないけど、何となく理解することができた。これからは日本国内で活動しながら、知識と語学を身に付け、海外で活躍できる人間になりたい。

この研修で私が一番興味を持ったことは環境教育である。自分自身で本に書いてあるネイチャーゲームをアレンジしてやったからかもしれないが、すごい楽しかった。これからはネイチャーゲームを使った環境教育について実践を通じて、能力を身につけていきたいと思う。

3－（2）－7　必ずしも答えは一つではない

小杉　優輝

感想

必ずしも答えは一つではない

人の解釈によってとらえかたは異なる。そのため答えは一つとは限らないし、決まったものもない。結果はもとより、それに至る理由のありかたは必ずしもひとつではなく、また、仮に同じ結果であったとしてもその理由づけが異なることがある。そのため私はこの二カ国を訪問することができ、面白いと思った。

小学校でのワークショップで生徒と堆肥づくり実践（プレイサール小学校、プノンペン、カンボジア）

なにが面白いのかというと、例えば、環境問題といってもその農村で掲げている問題が違うため一概に解決策はないし、また問題解決能力もその国によって偏りがある。そのため、その国で何が今、一番効率よく解決できるのかと模索することで、新しい発見ができる。そのとき、その場におかれた状況での問題解決力が大切であると思えるようになったのは、この研修でタイ・カンボジアの現地に行ったためであろう。

農村域の小学校でのワークショップ（ロンコール小学校、シェムリアップ州、カンボジア）

・視点

この二カ国を訪問することで、その国が掲げる問題点や改善方法を多角的に考えることもできた。また、現場を見ることでより深く農村が抱える問題などを理解することもできた。この二カ国での活動を通じて、抱える問題点を比較することができ、とても参考になった。タイ・カンボジアは東南アジアの途上国としてひとくくりにされるが、環境問題や改善点は異なっている。隣国ではあるが、土壌・気候・生態系が異なると環境も変わってくる。そのため、この二カ国をひとくくりできないことや、同じ環境問題としても解決策は変わってくるし、一概には述べられないことを

津波被災地での植林活動で活着調査実践（タイ国南部ラノン県）

実感した。また、タイからカンボジアに移動することで捉える視点や考えかたも変わったし、歴史・文化・環境変化なども気にするようになった。

船にのり植林樹木を探す（トゥンラック村、タイ南部パンガ県）

・つながり

この二カ国において、国境を越えたERCONの活動に参加して、人と人がつながることの難しさ、また大切さも実感した。今回の研修を通して「人とのつながり」について改めて考えさせられた。タイ・カンボジアにおいて、ERECONの活動をひとつ行うだけでも参加者・スタッフ・現地スタッフなど含めて約数百名の方々が関わっている。この方々の協力があって初めて、小学校でのワークショップ・農村での農業グループ活動などを行うことができると思う。そのことを知ったとき、環境保全活動という「とてつもなく大きな課題」を前にしたとしても、志を同じくする人々との「つながり」が、その解決を可能にしていくことを肌で感じた。人が関わっていくことで、点が線に、線が面になって、一見不可能に思えたことを可能にするような波が生まれてくるのを目のあたりにした研修でもあった。

今後の展望

しかし、この研修でなにか特別なことを学べたのか、というとそのようなことはない。この研修で得た印象は考えるきっかけでしかない。大切なのはこの経験をどのように活かしていくべきか、自分なりに答えを見つけることであろう。今後はどのようにしてこの経験を活かしていくのか。そのため、私はこの研修を振り返り、なにを感じたのかよく考え、これからの生活に取り組んで生きたいと思う。また、知識だけではなく経験も同時に身につけていきたい。そして、この研修で気づいたことや感動したことを周りの人に伝え広げていきたい。

毎日の長い移動時間、タイのドライバーさんとの交流でタイ語やタイの文化を沢山教わった（タイ南部ーバンコク間にて）

研修生主催のワークショップを終えて（ドゥシットプラチャサン小学校、タイ東北部コンケン県）

全員でホームステイした家族と共に（トゥンラック村、タイ南部ラノン県）